

# キケロ『修辞学論集』第2巻 観察記録

NPO 法人 書物の歴史と保存修復に関する研究会

講師・研究員 藤井かおり

書名	M. TVLLII CICERO-NIS RHETORICORVM SECVNDVS TOMVS キケロ 『修辞学論集』 第2巻
出版地	フランス・リヨン
年代	1546? (末尾は欠損のため不明瞭)
サイズ	天地：127mm 左右：77mm 東(厚み)：40mm 折丁数：40丁



資料提供：[ライブラリーリエバナ](#) (愛知・豊田)

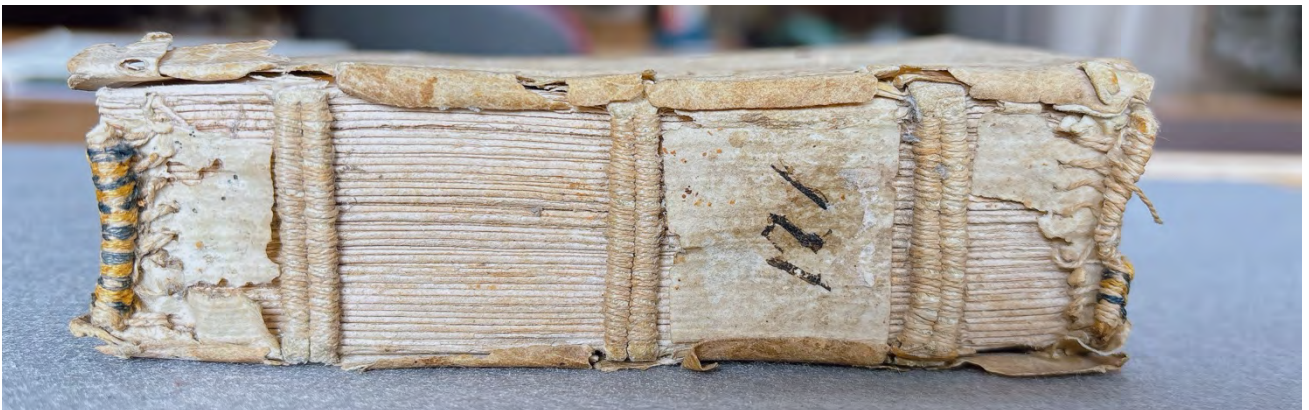
## ■ 外観的特徴

- ・表紙には羊皮紙が用いられ、いわゆる Limp Vellum 装の様式
- ・表紙に厚紙等の芯は入っていない
- ・前小口に留め紐の跡が残っているが、紐自体は切れて残っていない
- ・背表紙部分の羊皮紙は、欠損している

## ■ 見返しの構造

- ・装飾の無い白紙で本文用紙より荒い紙質
- ・二つ折にした白紙の見返しは、本文の最初と最後の折丁に巻きつけて綴じられている
- ・表裏ともに見返しの1枚目は、羊皮紙の表紙に貼り付けている

## ■ 綴じ



- ・コードには革が用いられ、ダブルコードの packed sewing  
※packed sewingとは、本文の背に出てきた糸をコードに巻き付ける際に隙間なく複数回巻き付ける方法のこと。15世紀初頭かそれ以前から使用されていたとされる。
- ・本綴じで、全ての折丁に糸が通っている
- ・糸は細めの麻糸
- ・背と前小口の厚みの差がほとんど無く、逆バツケにもなっていない。露出した背の状態からは、均等に折られ、適切な力加減で綴じられていることがわかる



## ■ ウイング (スパイン ライニング)

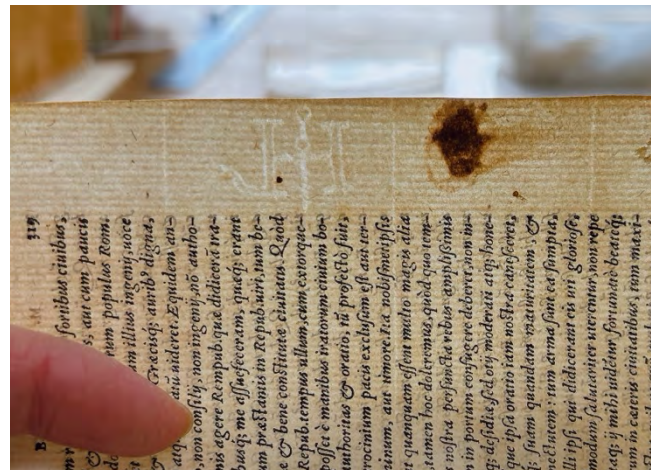
- ・コードの間には、パーチメントのウイングが貼られている (天から2番目は残存せず)
- ・ウイング部分は、背幅プラス両サイドにそれぞれ20mmほど長く、表紙と見返しの間に貼り込まれている
- ・天から3番目のウイングには「171」の数字が書かれている。他で使用した羊皮紙を再利用しているのかもしれない

## ■ 花布

- ・花布の芯は革紐
- ・白い麻糸の下編みの上に黄色と緑(?)の2色で編まれている
- ・下編みはパーチメントのウイングの上から綴じつけている



## ■ 本文紙



- ・本文は、4枚ひと折り (16ページ) で折丁が構成されている
- ・手漉き紙で鎖線 (chain line) と蜜線 (wire line) が透けて見える
- ・本全体を通して漉きムラはあまり見られず、質の良い紙だと言える
- ・印刷された文字は非常に細かいながらも鮮明
- ・透かし模様 (water mark) が入っている

- ・本文用紙の鎖線（chain line）は横方向に見られ、ウォーターマークは前小口側に概ね 16 ページ単位で確認できる
- ・『本の都市リヨン』（宮下,1989,p184）によると、仏・オーヴェルニュ地方・アンベールという紙の産地が「リヨンへの印刷用紙の供給をほぼ一手に引き受けていた」とあるため、この本に使われた紙もアンベール産なのかもしれない

## ■ プリンターズマーク

- ・タイトルページには、プリンターズマークがあり、印刷者・出版地の情報が印刷されている
- ・シンボルマークは、グリフィン（鷲の頭と翼、ライオンの体を持つ伝説上の生物）



① APVD	Apud（～によって刊行）
② SEB. GRYPHIVM	Sebastianus Gryphius（セバスティアン・グリフィウス）
③ LGDVNI	Lugduni（リヨン）にて
④ VIRTUTE DUCE, COMITE FORTUNA.	「徳を導け、運を道連れにせよ」（キケロの書簡の一節が印刷者のモットーとして記されている）

## ■ Sebastianus Gryphius（セバスティアン・グリフィウス）

- ・1500年代半ばのリヨンで活躍した印刷書籍商
- ・ドイツを故郷とする家系で、一族はパリ・イタリア・ネーデルランド（現オランダ）など各地で印刷業者として活躍した
- ・セバスティアン・グリフィウスは、ヴェネツィアで修業したのち、リヨン書籍商カンパニーの要請でリヨンにやって来たとされる
- ・伊・ヴェネツィアのアルド・マヌーツィオにより出版された小型本、いわゆる「アルド版」を手本として出版
- ・主に、ラテン語による古典・文法書・ユマニストの著作・宗教書を出版して一財をなし、1556年に亡くなるまでにおよそ一千点の書物を市場に送り出したといわれる

## ■ まとめ

この書物は、装丁やプリンターズマーク、サイズなど様々な点から16世紀のリヨンという時代性・地域性を感じることでできる本だと言える。

15～16世紀頃、リヨンは、パリと並んでフランスを代表する出版地であった。大学を中心として栄えたパリの出版業界に対し、周辺各国との交易の要として発展したリヨンは、商業的な成功を背景に多くの書籍が出版され、ヨーロッパ中へ輸出されていたという。

出版地としてのリヨンの最盛期といえる時代に作られたこの書物は、背表紙が欠損しているものの、綴じは非常にしっかりしており、歪みもほぼ無く現在も本の形を保っている。「折る」「綴じる」といった製本の基本的な技術の高さを感じる一冊である。

## 参考図書

- 高野彰 (2014).『洋書の話』.第二版 朗文堂
- 宮下志朗 (1989).『本の都市リヨン』.晶文社
- リシュアン・フェーブル(1985).『書物の出現 上下』.筑摩書房
- Jane Greenfield (2002).『ABC of Bookbinding』.Oak Knoll Press
- J.A. Szirmai (1999).『The Archaeology of Medieval Bookbinding』. Ashgate Publishing